

## グアテマラとのかかわり

新川志保子

私がグアテマラに初めて行ったのは1986年のことです。その前年の85年にメキシコに行ったのですが、そこでリゴベルタ・メンチュウの本『わたしの名はリゴベルタ・メンチュウ』を読み、衝撃を受けました。グアテマラ内戦下、政府軍による過酷な弾圧に対する先住民族の闘いがなまなましく語られていたからです。自分が生きている同じ時にこのようなことが起こっているということがとてもショックでした。しかもグアテマラはメキシコの隣です。メキシコの新聞にはグアテマラや当時やはり内戦中だったエルサルバドルの様子などが報道されており、それらの記事にも大きなインパクトを受けました。

グアテマラは当時はまだ内戦が続いており、行く先々で緊張感がありました。メキシコからバスで旅行したのですが、グアテマラに入ったとたんにバスはおんぼろになり、マーケットにでも売りにいくのか、野菜や果物、そして鶏などの家畜まで抱えた人々がどんどんバスに乗り込んでくるのにびっくりしました。たちまちバスはぎゅうぎゅう詰め、蚤にくわれながらの旅となったのでした。町に着く度に、あるいは橋などにかかる度に検問があり、緊張感がありました。検問のたびに乗客はバスから降ろされ、証明書のチェックや荷物のチェックをされるのでした。

そもそも私が中米に関心をもったのは、1979年に起こったニカラグアのサンディニスタ革命がきっかけでした。そのとき私はスペインにいたのですが、元宗主国という間柄のせいか、スペインではニカラグア革命の様子がテレビや新聞で詳細に報道されており、連帯運動も盛り上がっていました。革命勝利後、サンディニスタやその支持者が首都マナグアの通りを埋め尽くし行進している様子が何度も放映されました。人々のはちきれんような笑顔が印象的でした。このような大きな社会変革が同時代に起こっている、ということでまずニカラグアに関心を持ったのです。

その後ニカラグアやメキシコを旅し、日本でラテンアメリカ連帯運動をしているグループに参加して、スペイン語の翻訳などをしたりしました。それから再びメキシコを訪れ、グアテマラに行き、強い印象を受けました。それから、日本でも中米研究者などが中心になってグアテマラ連帯活動が始まったりしました。

私は1996年から米国ワシントンに移り、そこでグアテマラ連帯ネットワーク(NISGUA)という連帯組織があるのを知って、そこの仕事を始めて、今日に至っています。NISGUAは、米国政府の対グアテマラ政策を変えるためのグラスルーツの政治活動を行う組織で、市民の寄付によってその活動が支えられています。米国政府や議会へのロビー活動、グアテマラの状況や米国との関係についてのニュースレター発行、グアテマラの民衆組織代表を招いての米国スピーキングツアーなどのほか、グアテマラで人権モニター・同行プログラムを行っています。

## グアテマラへようこそ

日本のグアテマラ連帯活動にもできる範囲で参加してきました。内戦が終わり、社会的にも政治的にもグアテマラは大きく変わりました。抱えている問題の質も変わりました。が、社会変革の努力への国際社会からの連帯は依然として必要であり重要です。

そうこうしているうちに、グアテマラとの関わりも 10 数年になります。この間グアテマラで危険にさらされながらも人権活動を続けているたくさんの人たちを知りました。この人たちから実に多くのことを学びました。農村部での女性の自立支援プロジェクトに関わって、自分の立場についてや、彼女たちとの関係などずいぶんと考えさせられることもありました。大切な友人も何人もできましたし、二人の里子もいます。というわけで、いまやグアテマラは私にとって切っても切り離せない縁のある国となっています。